

サムルノリの教材化に関する実践研究

— 附属高校における授業実践報告 —

大村 幸子

(附属高等学校)

A Study of Introducing SAMURUNORI into Music Class

— Report on Music Lessons at Fuzoku High School —

Sachiko OMURA

2005年11月29日受理

抄録：本研究の目的は、朝鮮半島の音楽であるサムルノリの教材化について、実践研究を通して検証することであった。研究は2年にわたって行った。授業では、サムルノリ作品の一つである“ウッタリブンムル（ウッタリ地方の風物〔楽器〕の意）”を取り上げた。“ウッタリブンムル”は、サムルノリ初心者に最適な教材である。授業の分析は授業後に記させた感想文を用いた。その結果、次のような考察が得られた。（1）教師が主導しなくても、どのような音を出したいのか、生徒が自分で考えながら演奏表現できるようになった。（2）生徒の聴く耳を育てることに役立つ教材であった。（3）呼吸を合わせることの大切さを学べた。（4）生徒に自信を持たせる学習展開ができた。

今後は、身体的表現と結びつけた演奏表現ができるような支援のあり方を探ることが課題である。

キーワード：打楽器アンサンブル サムルノリ 授業実践 朝鮮半島の音楽

I. はじめに

附属高等学校では、生徒のリズム感を養うため、リトミックを授業に取り入れてきた。また、メンバーの音を聴いて演奏する表現力、協調性、リズム感などのアンサンブル能力を育成するため、様々な形態の合奏を教材として取り上げてきた。一昨年、朝鮮半島の打楽器アンサンブルであるサムルノリを知った。大衆芸能であるサムルノリだが、そのリズム感や躍動感、演劇的な表現は、芸術的な領域にまで高められていると感じた。サムルノリを演奏するためには、どのような表現をしたいか、どのような音が欲しいかについて、明確なイメージを持って演奏することが求められる。身体性を備えた表現活動の一環としてのサムルノリを授業に取り入れることは、アンサンブル能力を養うのに有効であると考えた。実践研究の1年目にあたる平成15年度は、高等学校ではサムルノリ楽器が未だ配分されていなかったこともあり、課外授業の形を採った。実践研究の2年目にあたる平成16年度は、1年目の考察を踏まえた上で、サムルノリを授業において取り上げた。

II. サムルノリの教材化に関する実践的共同研究 — 1年目 —

実践研究の1年目にあたる平成15年度、高等学校にはサムルノリの楽器が未だ配分されていなかった。また、教える側も学習方法を試行錯誤する状態にあったので、授業に取り入れるための予備段階として課外授業の形を採った。

1. 課外授業計画

1) 対象

サムルノリを演奏してみたいという希望を持つ生徒 計9人(1年6人, 2年3人)

2) 形態

課外授業

3) 実施期間

平成15年9月下旬～11月中旬

4) 使用楽器

大学所有楽器を借りた。

2. 課外授業の実際

1年目の実践研究は授業ではなかったもので、多くの時間を個人的な指導にあてた。

学習の手順は、以下に示す。

1) 教師が口音(クウム)^{注1)}する。つまり、楽譜は用いず、教師が口頭でリズム唱をする。

2) 教師のクウムを生徒が真似て口ずさむ。長短(チャンダン)^{注2)}が覚えられたら、口ずさみながら両膝を叩く。慣れてきたら、サムルノリの楽器を叩く。

3) 2)を何度も繰り返し、できるようになったら次のチャンダンの学習へ入る。

4) 新しいチャンダンが叩けるようになったら、既習のチャンダンとつなげて演奏する。

実践研究を計画した当初、生徒が1曲を覚えて演奏できるようになるには、最低5時間は必要ではないかと予想していた。しかし、その予想は外れ、生徒達は3時間半でチャンダンを叩けるようになった。予想を上回る早さで生徒が学習を進められた理由としては、サムルノリに関心をもった希望者のみの参加であったこと、ドラムや和太鼓の演奏経験のある生徒を半数含んでいたことの2点ではないかと推察される。

その後、再びクウムのみで学習し直し、どの拍に重心を感じられるか、どの楽器を聴くと揃った演奏になるかなどを全員で話し合った。5時間目は、前時の話し合いをもとに、アンサンブル主体の学習を進めた。個人練習の時間には、ドラムや和太鼓の演奏経験のある生徒は、響きのよい音を作るために、色々な奏法を自主的に試すこともしていた。6時間目は課外授業のまとめとして、サムルノリ演奏家の具良美先生の前でサムルノリ発表を行った。その後、具先生から公開レッスンの形で指導を受けた。また、具先生のグループによるサムルノリ演奏を鑑賞した。

3. 考察 及び まとめ

最初はサムルノリの持つ音楽的特徴に馴染めず、アンサンブルを楽しめなかった生徒達が、練習を重ねるにしたがって、音色をよく聴いてどのような音を出したいかを考えるようになっていった。さらに、まとまりのある音楽を演奏するためには、呼吸(いき)を合わせることが大切であることを体得した。

特に、6時間目の発表会では、生徒は多くのことを学んだようである。生徒の書いた感想文を要約する。生徒は、具先生の指導において何度もクウムをさせられた。そのことにより、クウムの重要性を身体で感じ、クウムで感じられるリズムの切れ目を音楽のひとまとまりとして捉えることができるようになった。また、音楽の輪郭が掴めたことにより、どれくらいの量の息を、どのくらい時間をかけて吸えばよいのかも体得できた。また、具先生達のサムルノリを聴き、呼吸(いき)のぴったり合った演奏や音色表現の多彩さを美しいもの、素敵なものと感じられたようであった。優れた演奏を聴くことにより、メンバーとぴったり合った演奏ができた時の充実感、楽しさ、音色の奥の深さを、より明確に理解できたようであった。このように、呼吸(いき)が合った時の喜びを経験することにより、アンサンブルの楽しさを充分味わえるようになった。

平成16年度は、サムルノリの楽器を購入することにより、実際に授業の中で実践していくことが課題である。その際の留意点は、様々な音楽嗜好の生徒が対象であること、リズムを体得することが苦手な生徒も多々含むであろうことである。従って、ゆとりのある授業展開を行うことが課題である。

Ⅲ. サムルノリの教材化に関する実践的共同研究 — 2年目 —

平成 16 年度も昨年度に引き続き、『サムルノリ』の教材化に関する実践的共同研究を行った。本年度は、昨年度の実践を踏まえて、授業として取り上げた。

1. 授業の目的

昨年度の課外授業を踏まえて、サムルノリを授業で取り上げる本年度の目的は、以下の三点である。

- (1) 生徒が隣国の音楽を知る。
- (2) どのような音を出したいのか、生徒が自分で考えながら演奏表現する。
- (3) サムルノリを体験することにより、呼吸（いき）を合わせることの大切さを学ぶ。
質のよいアンサンブルを作るためには、どのような呼吸をするとよいかを考える。

2. 授業計画

授業は、以下の流れで行う。

- (1) 朝鮮半島の様々な音楽を紹介する。形式は、鑑賞を中心に進める。
- (2) サムルノリ演奏をビデオ鑑賞する。
演奏者が腕や手だけでなく身体全体で奏していることや、その結果、音が巻き上がってくるような迫力ある演奏に仕上がっていることに注意を払って聴くように促す。
- (3) 実際にサムルノリ楽器を見せて、楽器の構造と発音原理について説明する。
どのように叩くとどんな音色がするか、楽器のどこを叩くとどんな響きがするか等を生徒に問いかけ、「どんな音を出したいかという気持ちが、音色や響きを創ることにつながる」と話す。
- (4) グループ練習を深める。
韓国で行われている練習方法に従い、学習を進める。即ち、楽譜は準備せずに、クウムでチャンダン覚えてから楽器練習に進む。
必要に応じて、適宜、ビデオ鑑賞や教師の助言を挟む。
- (5) グループ発表会を行う。
発表後、自由記述式に感想を書くように求める。

このように、前半は教師主導型の授業展開であるが、後半はクエンガリ^{※3)}担当の生徒がリーダーとなり、生徒主導型の授業展開を行う。

1) 対象学年・クラス

京都教育大学附属高等学校 1年音楽A講座（31名）1年音楽B講座（31名）1年音楽C講座（30名）

2) 実施期間

平成 16 年 12 月中旬～平成 17 年 2 月初旬

3) 指導計画（8 時間取り扱い）

朝鮮半島の音楽に親しむ。～アリランとサムルノリを題材として～	1 時間
サムルノリをクウムで楽しもう・サムルノリ楽器に触ってみよう	1 時間
サムルノリをクウムで楽しもう・サムルノリを演奏して楽しもう	2 時間
サムルノリをクウムで楽しもう・楽器ごとの違うチャンダンを聴き合おう～グループ学習～	1 時間
ノリ（遊び）を大切に演奏しよう～グループ学習～	2 時間
自分達の“ウッタリブンムル”を発表しよう	1 時間

3. 授業の実際 — 生徒の感想文を取り上げながら —

本論では、1年音楽B講座(31名)の授業を取り上げる。

1) 1時間目

朝鮮半島の文化的歴史的背景を知り、どのような音楽が生まれ親しまれてきたのかを学んだ。特に取り上げた教材は、“アリラン”と“サムルノリより〜ウッタリブンムル”であった。

次いで、著名なサムルノリ演奏家、金徳珠氏によるサムルノリ演奏と、民族学校の小学生によるサムルノリ発表をビデオ鑑賞した。

本時の授業内容を理解できているか確認するため、プリントを配布し、空欄をインターネットや本で調べてくるように課題を出した。

生徒の反応を見ていると、異文化の音楽に対する抵抗感はないようである。ただ、楽譜を持たず、チャンダンをクウムして身体で覚えて演奏する学習方法に対して不安を持っているようであった。

2) 2時間目

始めに、課題プリントの解答と説明を行った。

次いで、サムルノリで用いる4種の楽器を見せて、それぞれの楽器の構造や発音原理を説明した。さらに、楽器の形や音は自然界の何を表しているのか、それらが朝鮮半島の民衆の暮らしとどのように結びついているのか講義した。その後、チャンゴ^{注4)}のチェ^{注5)}の持ち方や演奏法を、教師が実演しながら説明した。その際、生徒は前時のプリントに書き込み学習をし、楽器や演奏の様子を絵で描いた。

その後、生徒にサムルノリを体験させた。実際に韓国で行われている学習形態を採り、学習はクウムで行った。つまり、楽譜は用いず、教師のリズム唱をそのまま真似して口ずさむことから始めた。

サムルノリは、チャンゴ(杖鼓)のチャンダンから学習した。細かいチャンダンに区切り、何度も繰り返しくウムした。慣れてきたら、クウムに合わせて両膝を打った。記述すると全て「トン」と記すことになるが、重い「トン」もあれば、前に進む軽い「トン」もある。クウムにおいても、なるべく正しく真似をするように求め、その語感を大切に膝を打つように注意を促した。しかし、本時の生徒の様子は、チャンダンを表面的に暗記することのみ意識が集中しがちであるように見られた。

3) 3時間目

前時の復習から始めた。前時では、チャンダン暗記に意識がとらわれがちであったが、1週間という時間を置いたことがよかったのか、かなり正確に覚えており、それなりに自信を持ってチャンゴを叩けるように見られたので、実際にサムルノリ楽器を用いて演奏することにした。

最初に楽器の扱い方を教えると共に、教師自身がチャンゴを演奏した。鼓面のどこを、どのように叩くと心地よい響きを得られるか、生徒に考えさせながら聴かせた。その後、生徒がチャンゴを叩いた。

授業後の生徒の感想は、「チャンゴは意外と大きい。ビデオでは左右に滑らかに移動して鼓面を叩いていたが、あんな風にやるのはとても難しいと思う。」「張ってある膜とチェの違いで、左右でこんなに音色が違うなんて、驚き！日本には無い楽器だと思った。」「膝打ちの時、先生が何度もここは軽いクンで叩こうとか、身体を前に傾けてドーンと叩こうとか言っていたけれど、実際にチャンゴでやるとそれがよく分かる。」「ビデオみたいにうまくやれると思いません。なんでサムルノリやるんですか？」などと記されていた。

4) 4時間目

前時の復習後、チャンダンの続きを学習した。前時と同じ手順で、チャンダンを短く区切ってクウムしてから膝を叩き、チャンゴを叩いた。何度も繰り返しくウムすることで、チャンダンを楽しみ、楽器に親しめるようにした。

授業後の生徒の感想は、「ちょっと慣れた。」「頭で理解してから叩くっていうより、身体が勝手に叩いてくれるのを信じて感じ。」「面白い。サムルノリが好きかも！」「変拍子っていうのが楽しい。」「と、サムルノリに

好印象をもったものが大半であった。

5) 5 時間目

前時に引き続き、チャンダンのクウムから学習を始めた。本時ではウッタリプンムルの最後まで終えられたので、発表会用のグループを作った。男女を均等に振り分けて、7～8人のグループを編成した。その後、グループ内で担当楽器を決めた。

続いて、担当楽器ごとに分かれて、その楽器のチャンダンをクウムで覚えた。4時間目までに学習した所をサムルノリの4種の楽器でできるようにして、それぞれ属するグループへ持ち帰り、アンサンブルしてみた。

授業後の生徒の感想は、「楽器が増えて豪華になったけど、私はチンという楽器の担当になったので、覚え直さなければいけないから、難しい。」「クエンガリをすることになりました。リーダーということで緊張するけど、ビデオを観て、やってみたかったから嬉しい。頑張ります。」「プツ^{註6}担当になった。プツは、チャンゴのトンの時とクンの時に叩けばいいと言われたけど、正直、難しい。チャンゴでやっていたリズムを全部叩いてしまう。」など大半は楽しんでいる様子であるが、チャンゴと違う楽器で異なるリズムを担当することになった生徒の中には、困惑している様子も見られた。

6) 6 時間目

サムルノリアンサンブル中心の練習を進めた。

本時の目標は、“ノリを大切に演奏しよう”なので、膝を叩く時にも、体でノリを楽しめるように導いた。留意点は、(1) 体で強弱拍を感じられるか (2) フレーズとしてのまとまりを感じられるか (3) 「トオン」「トッ!」「ドオーン」等、クウムで様々な音楽のニュアンスを楽しんだと同じように、膝を叩きながらも様々なニュアンスを楽しめるか (4) 叩いた瞬間の脱力を意識できるかを学習することになった。そして、楽器を叩く時にも、そのノリを失わずに叩けるように注意を促した。

練習中、生徒達から「もう1回ビデオを観たい」という要望が出たので、再度、金氏の演奏と小学生の発表を、全員で鑑賞した。クエンガリの合図が明確に必要であること、チャンゴのメンバーは息を合わせないとばらばらになってしまうこと、プツとチンが要所所で音楽を支えていることなどの意見を出して、再び練習に戻った。

授業後の生徒の感想には、「チャンゴは自分一人やったらうまく叩けるのに、チャンゴ3人になるとうまく揃わない。もっと息を揃えたい。」「クエンガリの人もしっかりしているので、私のグループは揃った。焦ってしまうからか、ちょっと速くなってしまうけど、うまくできた方だと思う。」「チャンダンをちゃんと覚えていたので、大きな音が出せた。気持ちいい!でも、アンサンブルはまだまだです。」「あと2時間で発表会。僕のグループはまだ個別練習ばかりしていてサムルノリになっていないから、不安です。自主練習したいです。」など、魅力的なサムルノリ演奏をできるようにになりたいという意欲的なものが多数見られた。

7) 7 時間目

授業前から練習に集まった生徒も多数おり、熱気を帯びた授業が展開された。次回は発表会であることを踏まえ、同じグループ内で教え合ったり、リーダーのクエンガリ役の生徒が掛け声を掛けながらメンバーを引っ張っていた。

どんな音色を出したいのか考える中で、「出したい音を出す為には、全員が同じタイミングで、同じように息を吸うことが大切である」ことに、生徒自身で気づくことができた。

授業後の生徒の感想は、「円になって練習しているとよく分かるけど、横1列に並び、発表の形態で演奏すると息が合いにくい。クエンガリを聴くゆとりがないと思った。それで、クエンガリの人を前に出して、後ろも半円状態にして演奏してみると、うまく合った。」「発表と思うと緊張するけど、いい感じで演奏できているので、このまま本番も楽しみたい。速くなるのは、緊張するからです。緊張しないように、課外練習が必要です。」「今日はバッチリ合う瞬間が何回かあって、とても嬉しかったです。本番はもっと格好よく演奏します。」など、アンサンブルとしてサムルノリを楽しみながら、次回の発表会に向けて工夫している様子が分かるものであった。

8) 8時間目

本時は、サムルノリ“ウッタリブンムル”発表会であった。

途中、演奏が止まってしまうグループが一つもなかったこと、クエンガリの生徒においては、ぎこちない生徒もいたが、メンバーに分かるように身体で演奏しようとしていたこと、練習当初は抵抗を感じたのか嫌々プッを演奏していた生徒が、豊かな響きで演奏を引き締めていたことなど、大変嬉しいことであった。

発表後の生徒の感想は、「クエンガリは責任が重い。でも、皆がちゃんと私の音を聴いてくれて、合わせようとしてくれたからよかったです。」「僕は最初、やりたくないプッになってしまって嫌だったし困ったけど、チャングの人達が、プッが大きな音を響かせてくれたら、すごく演奏しやすいと言ったので、頑張りました。手がとても疲れた。でも、うまくいってよかったです。」「楽しかった。でも、ビデオで観たプロの人の演奏は、神がかり的でした。体全体が楽器と繋がっていて、身体から唸るような、囁くような、とどろくような、派手な・・・色々な音が出てきているようでした。あそこまで鳴らせるようになるには、本当に長い年月がかかるだろうなと思います。」「サムルノリなんて、他の高校では習えなかったと思うし、やれてよかったです。」「先生が何回も息を合わせてって言ったけれど、それは他のアンサンブルでも言えることだと思います。息が合うと音楽もピタッと決まって、嬉しい。2年音楽ではコンサートがあるけれど、友達と息を合わせて頑張ります。」「最初、サムルノリをやるって聞いて、何のことも全然分からなかったし、ビデオを観た時も、僕らがそんなにバッチリ決まるように思えなかったの、どうなるのかなあと思っていました。でも、ちゃんと(演奏)できました。男女関係なく、皆が団結できたのが一番よかった。」「[注. 感想文中の括弧内は教師補足]「韓国や朝鮮の普通の人がこれを考え出して、庶民が娯楽として楽しんでいるっていうことに驚きました。距離はとても近いのに、日本にはこんな躍動的な器楽アンサンブルはないですし、こんなに拍子感がコロコロ変わるものはないですね? 打楽器だけで、こんなに格好いいものが仕上がるんだって、目から鱗でした。」と、それぞれに充実感を持って、サムルノリ学習を終えられたようである。

4. 考察(教材としての有用性について)及び まとめ

授業実践計画当初の目的は、(1) 生徒が隣国の音楽を知る (2) どのような音を出したいのか、生徒が自分で考えながら演奏表現する (3) サムルノリを体験することにより、呼吸を合わせることの大切さを学ぶ 以上、三点であった。

チャンダンを無表情に叩くだけだった生徒が、練習を進めるにつれて、「どうしたらいい音が出るのかなあ。」と疑問を感じ、更に「皮の真ん中をピンッと音がするように叩くと、いい音が決まる」と言うように、叩き方を工夫できるようになった。教師が主導しなくても、生徒が自分で考えて創意工夫できるようになったことから、サムルノリが、目的(2)の達成と共に、生徒のよく聴く耳を育てることに役立つ活動であったといえる。

また、生徒の感想文から分かるように、アンサンブルに必要な「息を合わせる」とは、文字通り、呼吸を共にすることである。演奏する皆の気持ちを合わせ、「息を合わせる」ことにより、サムルノリは演奏者にとっても聴衆にとっても、気持ちの良いアンサンブルに仕上がる。このことを生徒が実際の体験から意識できるようになったことは、目的(3)が達成できたといえる。

さらに、小さな声で呟くように自信なくクウムをしていた生徒達が、授業を重ねるにつれて生き生きと活動に取り組めるようになったこと、最初は「できない」と消極的な意見を述べていた生徒が、「やってよかった。楽しめるようになった自分を発見できて、嬉しかった」と記すようになったことから、サムルノリは生徒に自信を持たせる活動でもあったといえる。

以上、授業実践により、サムルノリは教材として有用であると結論付ける。

高校音楽Ⅱでは、グループを作り、自由な編成でアンサンブルする活動を計画している。サムルノリは、そのようなアンサンブル活動の為にも大変良い導入教材である。

IV. おわりに

最初は自信無く小さな声でクウムし、楽器を叩くだけで精一杯だった生徒も、練習が進むにつれ、積極的に活動することができるようになった。授業へ向かう時にチャンダンを口ずさみながらやって来る生徒も多数いた。特に、生徒が中心になって練習を進めた実践後半は、とても生き生きと楽器を叩き、力いっぱい響く音を出していた。生徒のこの変化は、大変印象に残っている。

実践のねらいであるサムルノリ教材化について考える時、今後の課題として、以下の数点が挙げられる。

- (1) 楽器の数が全く足りないため、代用楽器を準備すること。
- (2) 生徒が少しでも長く楽器に触れることを可能にする為、授業の進め方や支援の仕方を工夫すること。
- (3) どの学習段階において、プロの演奏を聴かせるとより効果的であるか、実践を重ねること。
- (4) どの練習段階で、どのような支援をすると、生徒からより生き生きとした演奏が引き出せるか、指導の手順に工夫が求められること。
- (5) サムルノリ本来の身体的表現も兼ね備えて、楽しみながら演奏できるように支援すること。つまり、生徒が立って踊りながら演奏表現できるように導くこと。

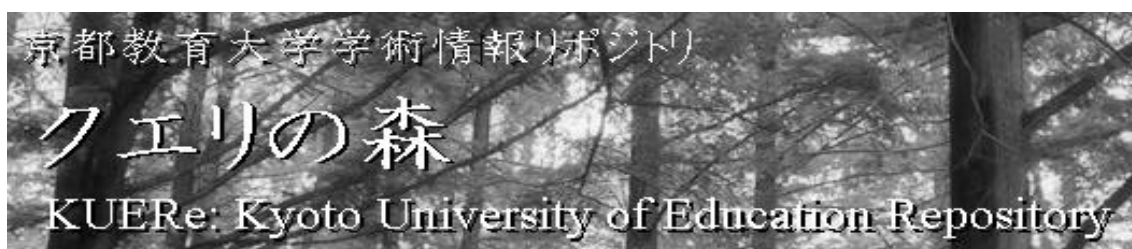
2年間の教育実践において、サムルノリはアンサンブル学習教材として大変効果的であると結論づけられた。この授業実践を来年度の授業に生かし、さらに充実したサムルノリ授業を展開したい。

注1) 口音	クウムと読む。口唱歌のこと
注2) チャンダン (長短)	一定のリズムパターンのこと
注3) クェンガリ (小鉦)	サムルノリ楽器4種の中の1つ。サムルノリにおいてはリーダーの役割を務める。平べったくて小さな銅鑼のような形である。クェンガリチェで打って演奏する。
注4) チャンゴ (杖鼓)	サムルノリ楽器4種の中の1つ。砂時計の形である。放射状に張られた紐を引っ張り、皮の張り具合を調節する。クングルチェ (左の撥) とヨルチェ (右の撥) の2本のチェで打って演奏する。
注5) チェ (杖)	サムルノリ楽器用の撥
注6) プッ (鼓)	サムルノリ楽器4種の中の1つ。平太鼓の形である。プッチェで打って演奏する。

〔参考文献〕

植村幸生, 1998, 韓国音楽探検, 音楽之友社
 韓国文化ネット (<http://insoo.net/minzokubunka/punmulnori.htm>)

なお、この論考は、平成15～16年度「朝鮮・韓国の打楽器アンサンブル『サムルノリ』の教材化に関する実践的共同研究」および平成17年度「身体表現と連動した音楽演奏の学習方法とその教育的効果の研究:『サムルノリ』を教材として」(いずれも研究代表者田中多佳子音楽科助教授)の教育研究改革・改善プロジェクト経費による共同研究にもとづくものである。



この文献は、国立情報学研究所において電子化されたものを、本学でテキスト加工したものです。

